

# 孤高の歌姫

## ——トルコのアレヴィーとして

「文化」の担い手を考えたとき、多数派・主流派のみが担うものなのかと言われれば、そうとも言い切れない。少数派によって連綿と受け継がれてきたものもあり、それがアイデンティティのよりどころになることもあるのだ。



アレヴィーの儀式で伝統的な衣装をまとったイェリッツ (撮影・寺田吉孝)

### 民謡好きな理由

トルコ第一の都市イスタンブールに、トルコでもっとも入学が困難な音楽大学がある。イェリッツはこの大学の民謡科に入学するために、毎日練習と民謡酒場で歌うアルバイトに励んでいた。アルバイトは週に五日、夕方五時に店に入り、終わるのは夜中の二時過ぎだ。彼女の母親はよくわたしに、「心配で仕方がないから本当は辞めてほしい。大学もいいが、それより早く結婚して落ち着いてほしい」と嘆いていた。二〇〇四年当時、結婚せず一人で長期間トルコに滞在していたわたしは、心配する母親に何も答えることができないでいた。

イェリッツはわたしと知り合った時点で、すでに四回その音楽大学を受験していた。民謡酒場の前は、高校卒業後すぐにホテルの給仕として働き、毎日民謡を聴いて自分なりに勉強していた。そこまで民謡を好きなことに日本人のわたしは感心していたのだが、その理由のひとつは彼女のバックグラウンドにあった。彼女はトルコの宗教的マイノリティとして知られるアレヴィーだったのである。



儀式のなかでセマーを実践するイェリッツ

### アレヴィーと民謡

アレヴィーと民謡(トゥルキユ)は切っても切れない関係である。アレヴィーは、自分たちをムスリムと称することが多いが、欠かすことのできない儀式であるジェムを、日本の三味線に似た民俗楽器パーラムの伴奏する歌によって進行する。ジェムは男女一緒におこなわれ、さまざまな要素からなり最後には「見「舞踊」」とも見受けられる身体動作もおこなう。これらのことが影響し、宗教儀礼のなかでの音楽や舞踊の使用にあまり好意的ではないスンニー派のムスリムが人口の多数を占めるトルコにおいて、常に異端として迫害を受けてきた。

儀式ジェムで詠われる歌の多くは、アレヴィーが信仰してきた聖者たちの残した詩に節をつけたものである。そのなかから宗教的意味の薄い歌が、トルコ民謡として知られるようになった。それは、かつてトルコに多く

存在し、村々を歌いながら歩き回り情報を伝達する役割を果たしていた吟遊詩人(アーシユク)の九〇パーセント近くがアレヴィーだったからである。村人たちは知らず知らずアレヴィーの歌を知ることになり、それは次第に国中に広がっていった。したがってトルコ共和国建国当時、地域の文化を収集しあらたなトルコ文化を創出することを目的に各地に作られた民衆の家(ハルク・エヴィ)で、伝統文化(民謡)の担い手としてアレヴィーが集められ活躍することとなった。上記の理由から最近まで公表することは少なかつたが、現在でもメディアで活躍する民謡歌手の多くはアレヴィーである。

### アレヴィーとして! 歌手として!

そのようなバックグラウンドをもっていたイェリッツは、都市化のなかで薄れていくアレヴィー文化を特に危惧していた。五回目の受験をパスした後、大学に通いながらイスタンブールに多くあるアレヴィーが信仰する聖者の文化の保存を目的としたアレヴィー文化協会の青年部主要メンバーとして活動した。さらに前述の儀式のなかで実践されるセマーとよばれる身体動作の担い手として、アレヴィーへの誤解がトルコ社会のなかで徐々に払拭されるにたがって増加している公演に出演していた。

大学院に進んだ彼女は、アレ



デビューアルバムのコンサートのポスター

ヴィー音楽(旋律や詩)についてのシンポジウムを大学や協会主催として企画し、また、アレヴィー系ラジオ局でも歌手兼MCとしてアルバイトをし、ゲストにイスラーム神秘主義教団メヴレヴィー教団の長老を招いて宗教音楽についての対談をするなど、積極的に宗教音楽についての話題提供をおこなっている。音楽を専攻するアレヴィーの学生として、マイノリティとされてきたアレヴィーがいかにかこの国の文化に影響を与えたか、直接的・間接的に訴えているのである。その一方、純粋に民謡歌手として活躍したいところから夢見ていた彼女は、現在ではCDデビューを果たし、多くのテレビ番組に民謡歌手として出演している。

トルコにアレヴィーとして生まれた彼女は、都会の生活のなかで忘れがちな自分がアレヴィーであるというアイデンティティを維持しながら、血のにじむような努力をし夢を着実に実現させている。